
FLYING

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FLYING

【Nコード】

N7012U

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

貴族の末娘ラキシユは、平穏ではないが幸せな恋をしていた。最愛の恋人と婚約できて幸せ絶頂の彼女だったが、二人の恋の歯車は次第にかみ合わなくなって――。世間知らずの少女が冒険世界に飛び込む青春ラブファンタジー。未成年喫煙のシーンがあるためR表記にしておりますが、物語はほのぼので、恋愛描写も薄いです。一話当たり短め。

別れと旅立ち 1（前書き）

作品の一部に恋愛・戦闘要素を含みます。また、本作品には未成年の飲酒・喫煙シーンが多く含まれますので社R（15R）とさせていただきますが、作品自体はほのぼのの傾向です。尚、推奨する意図はございませんので悪しからずご了承ください。閲覧の際は自己責任でお願い致します。

別れと旅立ち 1

「もーーーーー、今日という今日こそ別れてやるんだからっ！！！」

瞬間、窓に戯れていた鳥達が、一斉にぱつと飛び立った。

よく晴れた、平和な昼下がりを引き裂く叫び声に、ハイリィウィルバードはいつものように顔をしかめて耳を塞ぐ。

もうすっかり慣れた日常ではあったが、こうしなければ耳が痛くてかなわない。

「ラキシユ。わかったから、そんな大声出さないで頂戴」

「まあ、くやしーくやしー！！ ムカツク！！！」

無駄とはわかっていつつも呟いた言葉は、やはり無駄だった——溜め息をつきながら妹を見やると、相変わらずキーキーと叫びながら地団太を踏んでいる。

その様と言ったら、彼女も年頃の乙女であるのに……と頭を痛めずにいられない。

「とにかく、落ち着いて。今日は何があったの？ 聞いてあげるからとにかく座りなさいな」

溜め息と共に吐き出したその言葉に、ラキシユはその辺のクツシヨンを抱んでは放り投げるのを中断した。

「ほんと？ 聞いてくれる？ お姉ちゃん」

紫の瞳をうるうると涙をにじませにじりよってくる妹を、半分呆れながらながめるも、諦めに似た微笑を浮かべてハイリィは肯いてみせるのだった。

ラキシユィウィルバードは今年で16歳。

輝く長いブロンドと、美しい紫の瞳を持った、とびきりの美女——ではないが、可愛らしい面立ちをした少女だ。

この国——リースティイ大陸がノースリース地方、シエルフィア

公国では知らぬ者のない指折りの名門貴族、ウィルバード家の末娘にあたる彼女は、この春めでたく婚約の運びとなった。

相手の男の名はレイ・ヴァンガルド。ここから西のウェストリース地方にある、ルードリア国からの私費留学生である。

名門貴族といえば政略結婚が当たり前であり、彼女自身の兄もそうであったのだが、彼女は珍しくも家が絡まない純粹な恋愛をしてきた。

それは彼女の両親、そして歳の離れた兄弟達が彼女を目に入れても痛くないほど可愛がっている所以だろう。

この自由奔放、天真爛漫な愛すべきじゃじゃ馬娘を、貴族のしがらみで縛りたくはない。

そんな愛情を一身に受けて育ちながらも、やはりこの家そのものが彼女にとっては窮屈だったのか。

ラキシユはお嫁に行く日をそれはもう楽しみにしていたのである。が、だからといってそれが、彼女が幸せな恋愛をすることに繋がるかといえばそうでもなかったようだ。

「聞いてよーお姉ちゃん。レイだったら、また私のこと世間知らずだって馬鹿にするのよ！？」 そりゃレイはあんなに奔放に生きてたら世間とかにも詳しいでしょーよ！ 私だって色んな国に行ってみたし色んなことしてみたいけどできなかったんだもの！ 馬鹿にして欲しくないわー！」

毎日この調子である。

政略結婚でシエルフィアの公女を娶った兄のエイルは、窮屈な暮らしとはいえ、妻とは仲睦まじい。それを考えるとなんと皮肉な話だ。

ハイリ自身も数年前にシエルフィア有数の名門貴族に嫁入りしたのだが、夫は優しく理解がある――すくなくとも、こうして毎日のようにやってきては喚き散らす妹を笑って見てくれるくらいには。

ハイリもまた結婚生活に不満はなかった。

自由な恋愛をしてきたはずのラキシユだけがこの有様だ。

「ねえ、ラキシユ。そんなにレイと上手くいかないのだったら、いつそ区切りをつけて違う人に見てみたらどうかしら。お見合いしろとは言わないけれど、他に、もっと楽にお付き合いできる方がいるんじゃない？」

日々喧嘩の耐えないラキシユとレイを見かねて、ハイリは何度そう言ったことが知れない。

だがその度ラキシユは首を横に振るのである。

「たしかに、レイは無神経だし口下手だしデリカシーないし家柄もそれほどいいって訳じゃないし頑固だしすぐ私を馬鹿にするし愛想悪いし、でも――

好きなんだもん。レイじゃないとダメなの」

その理屈がハイリにはさっぱりわからない。

よくまあそんなに悪口を並べ立てた後で、好きだと言えるのか。

何一つ好きだという理由にはなっていないではないか。

ラキシユのその台詞は筋が通っていない気がしてならないが、でも『好き』と口にしたときの彼女の表情はとても幸せそうで、自信に満ちていて、だから羨ましいともハイリは思う。

レイはラキシユの言うように口数の少なく、滅多に笑顔も見せない寡黙な青年だったが、ラキシユを見つめる眼差しはすごく優しいのをハイリは知っている。だから思うのだ。

2人は諍いながらも、相手の短所すら認め合った上で愛し合っているのだと。

今こうして別れる、と喚き散らしているラキシユだが、きっと明日にはまたレイに会いに行くのだろう――その愛らしい顔に、幸せ

そんな笑顔を浮かべて。

きつとこの愚痴は、素直じゃない彼女流の惚気なのだろう——そんな風に考えながら、ハイリは今日もええんと続く彼女の愚痴を、黙って聞いてやるのだった。

別れと旅立ち 2

「……今、なんて言ったの？」

昨日さんざん姉に愚痴りちらしたものの、やっぱり彼に会いたくなつて――

ラキシユはやはり今日も、気付けばレイの家に向かっていた。

彼は留学先の寮に一人暮らしをしているので、彼女は何の気兼ねなく、しょっちゅう彼の部屋に入り浸っている。と言っても学校が終わってから門限までの限られた時間ではあるが。

学校で笑いあっているカップルや、時間を気にせず夜遊びしている友達を見ると、ラキシユは羨ましくて仕方が無くなるのだった。

ラキシユの通う、名門貴族のみ入学を許されるアカデミーにはレイは通えないし、いくら何でも夜遊びを許してくれるような家でも親でもない。

時間を気にせず、ずっと一緒にいたらいいのに――、ずっと秘めていたその思いも、だがあとしばらくの辛抱だ。

結婚すれば、ずっと一緒にいられる。

そう思うと昨日喧嘩したことすら忘れて、ラキシユはまだつつすら雪の残る道を、スキップ混じりに駆けて来たのだった。

たとえば昨日大喧嘩しても、次の日にはまた笑顔で会える。

だからどんなに諍いが絶えなくても、彼女はレイと付き合い続けてきたのだ。

今日もやはり、彼は穏やかな笑顔で彼女を迎え入れてくれた――それだけでラキシユは幸せな気分を噛み締めることができたのだ。だが、彼の一言がそんな気分にあっさりと水を差してくれてしまった。

煙草の煙を吐き出しながら、表情ひとつ変えず、先ほどの言葉を

レイが反芻する。

「だから、俺の国に来て欲しいって言ったんだ」

それは頬を染めて喜ぶようなプロポーズの言葉のようだった。

——普通だったら。

だが、既に婚約しているラキシユにとっては少し違う。

「え……でも、レイ。結婚したら、ここで——シエルフィアと一緒に住んでくれるって。この国で2人で暮らそうって、言ってたじゃない」

だから婚約したのに——、その言葉は言ったらマズイ気がして、胸の中だけに止めておく。

「俺もそのつもりだったけど、事情が変わったんだ。兄貴が家を出たから、俺が帰らなきゃならないんだよ。親は俺にヴァンガルド家を継がせたいんだ」

「そ、そんなこと急に言われても」

目眩いがして、ラキシユはその場にへたりこんだ。
瞬間的に、頭をフル回転させて考える。

レイのことは好きだ。

結婚するには彼以外に考えられない。

でも、この国で2人で暮らすという話で婚約した。

それはラキシユだけでなく、ウィルバード家の皆が認識していることだ。

違う国の、それも大した家の出でもないレイと婚約することは、実は親戚筋からは大反対されていた——それも無理のないことだったのだが、それでも両親は許してくれた。

家の伝統よりもラキシユの気持ちを汲んでくれたのだ。

だが、遠いルードリア国まで嫁にいく、となるとどうだろう。

ラキシユは堅苦しい自分の家が大嫌いだったが、自分と自分の気持ちで大事にしてくれた家族には感謝している。だからできるだけ家のしきたりも護ってきたし、貴族の娘として恥ずかしくないように振舞ってきた。

有事の際には家の力になるつもりも、これからは沢山親孝行するつもりもあつて、すぐに帰って来れないような違う国にいくような覚悟はしていなかった。

「ちょっと……考えさせて」

結局、彼女に言えたのはそれだけだったが、レイの機嫌を損ねるには充分だった。

「なんで今更考えるんだよ。ウィルバード家は、お前の兄が継いでるんだろ。お前が俺と結婚するなら俺の国に来るのが当たり前じゃないか」

「なっ、なんですって!？」

鬱陶しそうに煙を吐き出すレイの口調は、ただの世間話でもしているようなものだったが、ラキシユには世間知らずの我儘娘とでも言われているように聞こえてしまい、つかつかとなつて叫んでしまふ。

「そんなのあんまり勝手だわ!　うちにはうちの、私には私の事情があるのよ!!　それを勝手にそっちの都合で無茶苦茶にしたあげく、当たり前ですって!？」

「ラキ」

叫ぶ彼女を煩そうに――もつともそれはラキシユにそう見えただけかもしれないが、レイが諫める。

だが、そんなことで納まる彼女ではない。

「レイはいつも勝手なのよ!　いっつも自分の理屈で振り回して……」

「振り回してるのはお前だろ」

ラキシユの叫び声に顔をしかめ、思わずレイが呟く。呟いてから、

彼はしまった、という顔をした。

彼にとっては何気なかったその言葉が、彼女の逆鱗に触れてしまったことを、その表情で知ったためである。

だが、もう遅い。

すつくと立ち上がった彼女は、彼に向かってぴしゃりと言った。

「婚約は解消よッ！！ 貴方にはもうついていけないわ！！」

「それはもう何度も聞いた」

座ったままレイが言つと、ギロリと凄まじい形相で、彼女がこちらを睨みつける。――何を言っても彼女を怒らせるだけか、閉口しかけるが、そのままほんとに婚約解消の手続きにでかけそうなラキシユを放っておくこともできない。

レイは慣れた手つきで煙草の火を消すと立ち上がり、宥めるように彼女の髪を撫でた。

「ラキシユ、俺はお前に、俺の国に来て欲しいんだ。一緒にいたいんだ」

何を言えば彼女が喜んでくれるのか――気の利いた台詞のひとつでも言えればいいのに、生憎レイはそのような言葉を知らない。

それでも彼は懸命に自分の気持ちを訴えた。

それにはラキシユも黙らざるを得ない。

「それは――私も同じよ。でも……」

でも、だからと言つて彼の要求に応えられるかと言えば、現時点ではNOとしかいいようがない。

「だいたい、私の返事1つで決めれることじゃないわ。両親や、親戚とも相談しないと」

その言葉に、今度はレイが失望したように手を離したので、思わずラキシユはびくりとする。

「お前は普段から家が嫌だと言っている癖に、結局家を優先するんだな」

再び窓辺に座り込み、煙草に火をつけるレイを――ラキシユはひ

どく客觀的に見つめていた。

紫の双眸から涙が流れるのに、気付いていない訳はないのに――
彼はただ、煙を吐き出している。

「あ、貴方にはわからないわッ!!」

それでも精一杯それだけをはき捨てて、ラキシユは寮を飛び出した。

スキップを踏みながら辿ってきた道を、泣きながら駆ければ、残り雪に足をとられて派手に滑って転んだ。

――惨めだ。

幸せだった気分が一気にしぼんでしまった。

別れと旅立ち 3

「ラキシユ。誉れ高く、清廉で、誠実な人間で有りなさい」

はい、お父様お母様。ラキシユは誉れ高く清廉で誠実であるよう努めて参りました。

そうじゃなかったかもしれないけど、そう有れるようにはこれでも頑張ってきたつもりなのよ。

公主さまのところになつてお嫁にいつたつて恥ずかしくなくらいの立ち居振る舞いはしてみせるわ。

だけど私はそんなのまっぴらごめんよ。

私は自由に生きたいのに。

あの青空を往く鳥のように、好きに飛びたいだけなのに。

転んで雪に濡れたままの服で、ラキシユは独り公園のベンチに居た。

いつものように姉の元へいこうかとも思ったけれど、レイに『ルドリア国へ来て欲しい』と言われたなんて、とても言い出せそうにない。

レイには分からないだろう。

シエルフィアでは、ウィルバード家の者を娶る、若しくは嫁に行くことはステータスにすら成り得るのだ。本来ならラキシユは高嶺の花だ。

彼女さえその気になれば、国中の有力貴族の中からよりどりみどりに伴侶を選べる。

そんなラキシユに、『俺のところに来い』などとのたまえる者はシエルフィア公国にはいないだろう。

レイにはそれが分かっていない。
自分がどれだけ爆弾発言をしたか。

そしてそれが如何に身の程知らずかと言うことが。
ラキシユの両親がいくら理解のあるほうだと言っても、これでは馬鹿にされていると思われかねない。

言えば、レイの印象を悪くすることはまず確実だろう。
それでなくとも、無愛想で自由奔放に生きている彼を家族に馴染ませるのには手を焼いていると言うのに。

「……レイにはわからないわ」

胸のうちに思っていたことを小さく口に出し、ラキシユは疲れたように首を左右に振った。

そう、彼にはわからない。家のしがらみなど、従うしかない辛さなど。

だからラキシユはレイが好きなのだ。

「俺の人生は俺だけのものだ。誰の言うなりにもならない」

それが彼の生き方。そしてそれにどうしようもなく惹かれた。
それはラキシユには絶対にできない生き方だったから。

何度反抗しようと思ったか知れない。

何度「もう嫌」と叫んで飛び出そうと思ったか知れない。
でもできなかった。

どれほど疎ましい家でも、どれほど望んでないなくても、家族が自分を愛していることを知っていたからだ。

だから、親の期待と信頼を裏切るような真似はできなかった。
そしてそれが余計にラキシユを苦しめた。

レイのように生きれたらいいのと思う。

レイは鳥のようだった。なにものにも掴まらない、奔放に空を往く、鳥。

（——眩しいよ）

ふと目の前が暗くなる。

誰かが自分の前に立ったからだと気付いたのと、それが誰かわかったのは同時のようなものだった。
顔を上げるとぼろぼろと涙が落ちる。

「私は、飛べないよ。……貴方のように、飛べない」

紫の瞳に、婚約者の姿を映す。

少し襟足の伸びた黒髪に、髪と同じ色の漆黒の瞳、中肉中背で、滅多に笑みの浮かばない表情。

彼の名は、レイ・ヴァンガード。

言葉少なく、表情に乏しい彼の読み取りにくい感情が、ラキシユには手に取るように解る。

世界中の誰よりも、彼を理解している自信があったのに、どうしてもすれ違うことばかりなのだろう？

レイはそつとラキシユの涙を拭ってやると、手を貸して立ち上がらせた。

そして——優しく抱きしめる。

「わかってるよ。責めるつもりはなかったんだ」

そう言うレイは少し息が切れていて、自分を探して走り回っていたということが知れた。

だから、素直に彼の胸に顔を埋める。だが、

「でも俺は——国に帰るから」

幸せな気持はもう返っては来ない。

目の前が真っ暗になってゆく。

どうすれば引き止められるか考える自分は、多分どうすれば自分を連れて行けるか考えている彼と大差なく、だから彼を責めることはできない。

家の大きさなど彼には意味を成さないのだから。そして、彼のそういうところが好きなのだから。

束縛されない彼が帰ることを決めたのなら、束縛しているのは自分の方。

「でもラキを失いたくない」

（レイ、それは我儘よ）

だけど、これは今まで我儘を通してばかりいた自分には言えない台詞。

「私もレイと離れたくない。でも私は行けない」

レイの腕を離れて、ラキシユははっきりと言った。

もう、全部がうまく行く答えはでないことは、2人の言葉で知れていたから、ラキシユは結論を口にした。

「別れましょう——レイ」

別れと旅立ち 4

「私達、別れた筈よね？」

窓辺で煙草を吸うレイ。その腕の中に収まったラキシユは、苦悩の表情で問いかけた。

ああ、と短い返事を煙草と共に吐き出すレイは相変わらず無表情で、ラキシユの困惑を大きくする。

別段いつもと変わらない日常。だが、それでは困るのだ。

彼とは、もう別れたのだから。

（この私の苦悩を、レイは分っているのかしら？ ううん、ぜーったいわかってない！）

レイの腕を押しつけて、ラキシユは立ち上がった。

「帰るッ」

「なんで？」

即答するレイは言葉どおり少し不思議そうな表情をしていた——もつともラキシユにしか読み取れないような僅かな表情の変化だったが。

だが、ラキシユが脱力するのには充分だ。

「なんでってね……。さっきも言ったでしょ？ 私達別れたのよ」

「ああ」

「でもこれじゃ全然別れる前と変わってないじゃない？？」

「ラキがうちに来るからじゃないのか？」

ぐっ、とラキシユが言葉に詰まる。

「なっ、何よっ。借りてたものとかを返しにきただけじゃないっ。」

もう来ないわよっ」

「ラキ」

レイから顔を背け、玄関の方へ足を向けたラキシユの手首を、レイが座ったまま掴む。

「帰れって言ったわけじゃない。……別れたら、もう会っちゃいけないっていうわけじゃないだろ？」

強い力で引き寄せるその手を、振り払わなければ何も変わらないことはわかっている。

だができないのだ。

そうさせてくれないのはレイじゃない。

それはラキシユの右手の薬指が知っている——そこには外せないままの婚約指輪。

こんな風に、別れようとしたことなんて今までに何度もあった。

無表情で無愛想で言葉の少ない彼を誰よりも理解していたのはラキシユだが、同時に誰より苛立っていたのもラキシユだ。

デートの最中も仏頂面。甘い言葉のひとつもくれない。

そんなのレイに望んでも仕方ないと頭ではわかっているけど、求めてしまうのもまた仕方ないことだろう。

結局レイの手を振り解けずに、彼の胸に顔を埋める。

ラキシユは煙草が大嫌いだった。煙たくて気持ち悪い。

でも、レイに抱きしめられるとき、口付けるときに香る煙草のにおいは、どうしてか安らぐ。だから、ラキシユはレイが煙草を吸っても何も言わない。

どうしてこんなに落ち着くんだろう。

どんなに喧嘩しても、どんなに落ち込んでも、それだけでもう全てを忘れて全てを彼に委ねられるのだ。この幸福の為ならどんな苦しみも辛さも厭わないと思えるのだ。

だけど、今回だけは、そういうわけにはいかない。

わかってるのに流される。

（これじゃダメだわ）

その思いは、今までの比ではない。
終わらせなければならぬ。
でも終わらせられない。

どっちも選べない。

レイと共にルードリアへ行ける気もしないが、この手を振りほどいて指輪を外すこともできない。
彼の胸の中は、一番の安息の場所だった筈なのに、今は苦しくて仕方がない。

息が詰まりそうだった。

別れと旅立ち 5

「私、留学したい」

唐突な娘の言葉に、ラキシユの母、エルシア「ウィルバードはぽかんとした表情で彼女を見た。

おずおずと彼女を見上げるラキシユ、ぽかんとしたまま娘を見つめる母。

沈黙の中、だがエルシアはおなべが吹き零れて、炎に弾ける音で我に返った。

——使用人などいくらでもいるのだが、この母は家事全般できうる限りは自分でする。

夕食どき、いい匂いに包まれたキッチンでのことだった。

お玉を片手に、呆然とした表情の抜けきらない顔で母が問う。

「それはまた……急なことね」

「別に急って訳じゃないわ。前からそういう話がアカデミーの方であつたの、お母様も聞いてたでしょ？」

「それはそうだけど、あなたに行く気がなかったじゃない」

「うん、まあ」

曖昧に返事する。

留学の期間は2年。結婚を控えていたこともあつたし、何よりレイと離れるのが嫌で、気にもとめなかった話だ。

「ええと、ほら。結婚も控えていたでしょ？ でもえーと……その、ほらさ。やっぱり恋人を基準にして、したいことができなくなるって、なんだかやっぱり後で後悔するんじゃないかなーと」

どうにかもつともらしい理由と理屈を並べる。

嘘をつくのは苦手だが、あながち嘘でもないと言葉はけっこうスラスラ浮かぶ。

語学の成績が優秀だったラキシユは、アカデミーから幾度となく

留学を勧められてきていた。奨学金すら出してくれると言ったほどだ。

ラキシユも語学は嫌いではないし、外国に興味はある。だけどどうしても行きたいわけでも語学関係の道に進もうと思っていただけでもないの、それぐらいならレイの傍にいたいと思っただけだ。

「あら、あんなに結婚を楽しみにしていたあなたの言葉とも思えないわね」

鍋の火加減を弱めながら、エルシアがクスリと笑う。

「ええと……留学先はエルラントだったかしら？ 随分遠くだから、あなたが行かないって言って正直ほっとしてただけ……」

エルラントはリースティイ大陸の南、ユールラント大陸にある国だ。つまり海を越えたさらに向こうの見知らぬ大地である。

穏やかな笑みがみるみる不安げに曇る。

「結婚を強いる気はないけれど、そんなに遠くに行くくらいなら、私は結婚してこの国に居てくれた方が安心だわ」

母の言葉にギクリとする。

違うんです、お母様。結婚してももう私はシエルフィアにいれないみたいなんです。

そもそもこの結婚自体もう怪しいんです。

私レイと別れちゃったんだもの。

だがそんなこととても言えそうにない。

あれほどまでの大反対を押し切ってようやく婚約にこぎつけた話を、ここまでできていきなりふいにだなんて。

「レイさんには話したの？」

「ううん、まだ……だけど。明日話そうかなって」

「もう、この子は」

エルシアは火を止めると、お玉を持ったまま腰に手をあてた。

「いい？ あなたはもう婚約しているんだから。留学なんかしたら式も延びるでしょう？ 向こうのご両親にもきちんとお話しなきゃいけないじゃない。あなたの一存で簡単に決めれるものじゃないわよ？」

「……はい」

とりあえずは頷きながらもラキシユはまた胸中で唸る。

違うんです、お母様。向こうのご両親は、婚約とか結婚とかそんなこだわらないんです。

そんな律儀な家じゃないです。結婚も離婚もウチみたいな家の一大事とかそんなじゃないんです。

多分あらそうなのくらいで終わります。

けどそんなことをこの母が、それこそ「あらそうなの」と理解してくれるはずもない。

だがエルシアはお玉を置くと、両手をラキシユの肩にのせ、微笑んだ。

「でもね。結婚して縛られてしまう前に、外の広い世界を見ておくことには賛成したい気持ちもあるの。私はそれができなかったこと、すぐく残念に思っているから」

意外な言葉にラキシユは顔を上げた。

「気持ちが決まっているのなら、自分でお父様を説得しなさい」
優しさと厳しさの混じった母の瞳に、ラキシユが強く頷く。

今このままシエルフィアに——レイの傍に留まれば。

不満があっても嫌だと思っても、きつとレイの傍にいたら流されてしまう。

流されるまま将来を決めてしまうなんて、嫌だった。

キッチンを後にしながら、目の端に母の姿を映す。

——使用人に家事を任せない母を、父がよく思っていないことをラキシユは知っている。

——時として2人の間を流れる冷たい空気をラキシユは知っている。

2人もまた、周りに押し付けられた結婚ではなく、大恋愛の末の結婚だった。

ただ母、エルシアはウィルバード家に負けないくらいの名門貴族の娘だったので、特に問題もなかったのだが。

それでも、望んで一緒になった筈の2人が、決して今も望んで一緒に居るわけではないことをラキシユは知っている。

だからといって、兄や姉のような結婚生活も、決して羨ましいとは思えなかった。

彼らは自分の思いを出さない。優先されるのは自分の気持ちではなく家の事情。

喧嘩をすることもないが、それ以上わかりあうこともないつかず離れずの関係。

それでもそこに愛があるとすれば、傍にいればそれだけで幸せなのかもしれない。

よく夫婦を空気のような存在と言う。

当たり前のようにそこにあるけれど、なくてはならないものだ。

でも、とラキシユは思う。

（空気のような存在だなんて、私は嫌）

そんな日頃は存在を認識していないような存在なんて。

何も言えない関係なんて嫌。

いつも私を見て欲しいし、私もいつまでも好きでいたい。

だけど――

私、いつの間にかそうになっていた。

自分が恋をして分かった。

好きな人の為なら、その傍にいる為なら、何をも厭わない激情を。

だから――

私はレイの傍を離れる。

それは決してレイが嫌いだからじゃない。

彼を空気にしてしまっている、自分の想いを変えるために。

別れと旅立ち 6

「私、やっぱり別れない」

朝早くの訪問者に、レイは眠い目をこすった。

一人暮らしできままにすごしている彼は、典型的な夜型人間だ。

ラキシユもまた朝は苦手で、遅刻こそしないものの学校にはギリギリ到着。

彼女が朝に尋ねてくるなど、付き合っけてっこう経つが一度もなかった。

ドアを開けて彼女の姿を見るなり、レイは怪訝な顔をしたものだが、開口一番彼女が言った言葉に僅かばかり、無表情なレイの顔に笑みがよぎる。

「……そうか」

言葉もまたぶっきらぼうなものだったが、ラキシユには解っている。

彼も彼で悩んでいたこと、怒らせたことを後悔していたこと、そして今、ものすごく彼が安堵したことも。

だけどそんなことはいつも分かっているのだ。

分かっていることとすれ違うことは別。

煙草のにおいがしみついた、彼の胸の中、何よりも安心するその居場所に顔を埋めて――

だがラキシユははっきりと言った。

「私、留学するの」

レイの胸から顔を上げ、まっすぐに彼を見る。
驚いたように見開かれた漆黒の瞳に、迷わず「二の句を告げる。

「もう決まったの。エルラント。2年間」

端的な言葉だが、彼を驚愕させるには十分な単語だ。

「……いつだ？」

「来月頭に発つわ」

彼の言葉もまた端的だったが答えを返すには充分だった。
微笑みを崩さないまま、即答する。

「どうして……」

だがその答えにはすぐに答えを返せなかった。

レイの顔から視線を外し、目を閉じる。

——どうしてだろう。

自問する。

最初はただ――

彼が自分を置いてでも国に帰ることに対抗したかっただけかもしれない。

だったら自分も離れてやろうというつまらない意地だったかもしれない。

でも、意地だけだったらここまで行動は起こせなかった。

「ひとりで考えてみたいの」

言葉を選ぶようにして、一言一言、噛み締めるように。
明るい紫の瞳を開けて、ゆっくりと言う。

「私、我儘ばかりだった。すれ違うことばかりだった。辛いこともいっぱいだった。でも、やっぱりあなたが好きだから——別れないでも、でもね、この先もこんな気持ちを繰り返しながら、あなたの傍にいられる自信はないの」

その瞳に窺える強い意志に、レイは言葉が見つからなかった。もう決まってしまったことに、彼女が決めてしまったことに、今更何かを言ったところでどうにかなるとは思わなかったのだが、さすがのレイでもこのラキシユの決断を「そうか」の一言では流せない。

「なんで……先に相談してくれなかったんだ。それにどうせ俺はもうすぐ国に帰る。ひとりで考えるのはそれからだって良かったじゃないか」

レイの言葉に、ラキシユは困ったような曖昧な表情を浮かべた。もちろんそのくらいのことはラキシユだって考えている。だけどそうしなかった自分の考えを、レイが理解してくれるとは思えなかった。

それでも——曖昧に誤魔化すことはしたくない。腹を決めて話します。

「相談しなかったのは、したらきつと行けなくなるからよ。そうやって流されるのが嫌だから留学を決めたのに、それじゃ意味がないじゃない。レイが国に帰ってもそれは同じ。このままここにいても私は流され続けるだけだわ。流されて結婚だなんて、私はそんなの嫌。だから別れましようって言ったの。でも、やっぱり別れられなかった。だったら全く別の道を探すしかないでしょう?」

上手く表せない気持ちを、それでもなんとか言葉にする。だが予

想通り、レイは不可解な表情をしていた。

きつと彼にはわからない。

何もかもが矛盾だらけ。別れたいのに別れたくない。好きでいられないのに好きなのだ。

こんな矛盾は彼にはわからない。

「解ってくれなくてもいい。でも私は行くわ」

「……俺には解らない」

呟いた言葉に、レイも呟く。

それもわかりきっていたことなのだが、それでもラキシユは寂しく笑った。

そんな彼女をレイはまっすぐ見つめる。

「……だけど、お前がそう決めたなら……俺も一人で考えるよ。お前のその、言葉の意味を」

慣れない笑顔を浮かべた恋人を、ラキシユは驚きの混じった瞳で見つめ返した。

やがてその目には涙が浮かぶ。

少しだけ、ほんの少しだけ——ラキシユは後悔した。

考え方も性格も行動も何もかもがこんなに違っても——こんなに自分を想ってくれる人の傍を離れることを。

だけど、後戻りはしない。

前に進むために。2人共に過せる未来のために。

「私、帰ってくる。貴方と一緒にいる為の答えを見つけて」

結局我儘になっちゃったね。ごめんね、レイ。

胸の中だけで謝りながら——ラキシユは愛しい人の胸に再び体を預けた。

二人の少年 1

「ふあゝ……たいくつうう」

一等客室を貸しきつての優雅な船旅。

その豪華な部屋に鎮座するお嬢様は、だが派手に大あくびをしていた。

一人旅だ、誰に遠慮をすることもないだろうとふかふかのベッドにボスンと倒れこむ。

「あー、もう寝ちゃおうかなあ」

そんな独り言を言うが、まだ昼である。

出航したのはほんの一刻前。だが岸はとっくに水平線の彼方、窓の外には海、海、海。

外とはいえ生憎の雨で、デッキに出ることもままならない。

それでも最初は期待と不安に満ちた旅立ちに胸を膨らませ、窓から水面を眺めていたが、飽きもせず、という訳にはいかなかったようである。

ラキシユ＝ウィルバード16歳。

国では知らぬ者のない大貴族の末娘は、大都会エルラントへの留学の途で、余所行きのフレアーワンピースのままもぞとベッドに潜り込んでいた。

「むううースカートがもぞもぞしてじゃまだなー」

この場に母がいれば嘆かわしい、と激怒したことだろう。

母、エルシア＝ウィルバードは普段は温和でお茶目で天然のくせに、こと礼法、作法に関しては鬼のように厳しかった。

しかし、そんな母も今はいない。

胸中でふふん、とほくそ笑む。

遠い国への留学には不安がある。恋人と離れてしまうことには寂

しさもある。

だけど厳しい家を離れられること、一人暮らしへの楽しみはそれをずっずつと上回った。

「楽しみだな……もう門限もないし……いっぱい遊びたいなあ。これでもう、レイにも世間知らずって言われなくて……すむ……」

船の揺れが心地良い。母に船酔いの薬を持たされたが、そんな心配はなさそうだ。

まるでゆりかごのよう――

むにやむにやと独り言を言いながら、昼過ぎからラキシユは眠りに落ちていた。

――コンコン。

どれくらいまどろんだだろうか。

どこか遠くの方でノックのような音が聞こえ、ラキシユの意識はゆるやかに覚醒へと向かっていった。

――ゴンツ、バンツ……!!

激しい音に、ばちつと紫の双眸が開く。

だが頭はまだ寝ぼけていてうまく回らない。

ここ、どこだっけ。

そんなことを考えているラキシユの耳に、扉の外の声が僅かに聞

こえる。

「誰もいないんじゃ……か……」

「……一等客室……いれば、良い金蔓……」

「え、なに……？」

足音が遠ざかっていって、ラキシユは身体を起こした。窓の外を見るに、雨で陽は差していないもののまだ明るい。眠っていたのはそう長い時間ではなさそうだった。

波の音とデッキを打つ雨の音でよくは聞こえなかったが不穏な単語が聞こえた気がする。

慌ててベッドを降り、扉に手をかけて、はたと手を止めた――

もしかして海賊……とか？

ラキシユの頭に、ドクロマークの旗を翻したおどろおどろしい船が浮かんで、窓の方に小走りに歩み寄る。

至って真剣だったのだが、無論窓から見える海にそんなものは見えなかった。

思い過ぎかなあ。

ふつつと息をはいて、ブロンドを手櫛で整えていると。

「きゃああああッ……」

そんな複数の悲鳴が波間を縫って確かに聞こえ、激しい物音と叫び声がその後続き。

思い過ぎと思ったこと自体が思い過ぎであったことを、ラキ

シュはようやく理解したのだった。

二人の少年 2

「なんでこうなるのぉ……？」

一般客室であるロビーを覗いて、ラキシユはへなへなと腰を抜かしてしまう。

そこでは新聞などではたまに目にする、だが決して自分とは縁のないものだとかのどこかで思っていた事件が繰り広げられていた。

先ほどドアの向こうで聞いたのと同じ声で、叫ぶ男が手にするのは、抜き身の剣。

ちかちかと外から入る弱々しい光を反射させるそれを見て、一層ラキシユは血の気が引いた。

凶器を手にしているのは彼だけではない。ほかに二人。

よく見てみれば、男といっても、いずれもまだ少年と言って差し支えなさそう。

自分よりかは年上だろうが、そうそう大差はない気がする——だが、抜き身の剣をふりかざして叫ぶ彼らの前に、善良な一般客達は成す術もなく。

列を成して彼らに荷物を明け渡ししている。彼らはそこから、手際よく金目のものを抜き取っていく。

（やっぱり海賊だわ……！ ど、どうしようっ）

幸いにも自分はまだ見つかっていないようだ。

だがだからといって、行動にどういう選択権があるだろう？

逃げようにも海の上。かくれんぼを続ければ逃げ仰せられるかもしれないが、エルラントにつくまでそんなに精神力が続くだろうか。それに、一人だけ逃げるというのも気がひける。

大体にして、腰は抜けるし震えは止まらないしで、動けそうには

なかった。

(っっ、助けてっ、レイっ)

恋人を思い描いてみても、見送りにきていた彼がこの船に乗っている筈もなく。

かっこよく現れてこの窮地をヒーロー宜しく救ってくれる、そんな都合の良い話などありはしないことは、錯乱した頭でも解っているのだが。

うずくまって頭を抱え、現実逃避するラキシユを現実に取り戻したのは――

鋭い悲鳴だった。

「きゃあああッ」

その声は、舌つたらずで幼い。

思わずもう一度中を窺うと――男のうちの一人が、小さな女の子の腕を掴んで母親から引き離そうとしているところだった。

(――人質にするつもりだ！)

そう思ったその瞬間、見事にしゃんと腰が立ち、考えるよりも前に、彼女は動いていた。

「やめなさいよッ!!!!」

一様に、その場の全ての視線が集まったのを感じた瞬間。

恐怖と震えが一気に揃って返って来る。

考えるよりも先に動いてしまったのだから仕方ない――だけど、少しでも考えていたなら――

この行動は明らかに浅はかだったと、きつと気付けた筈なのに。だけでもう遅いから――

せめて腰が抜けなかったことに感謝した。

「そんな小さい子を入質にするなんて、それでも男ー！！？」

ああこれが最期の言葉になるかも。

お父様お母様ごめんなさい。

そんなことを考えるまでは、まだ余裕があつたのかもしれない。
だが、何事か叫びながら、剣を持った男の一人がこちらに駆け寄
ってくるのを見て

——その明らかに友好的ではない形相を見て——

どつと、後悔と、本物の恐怖が突き上げる。

「きゃあああああああああああああああああッ！！
！！！！！」

多分、さっきの少女よりも派手に、みっともない悲鳴をあげただ
ろう、だけどそんなことにもかまっていられなくなるくらい、恐怖
で何もかもがわからなくなつて。

殺されるッ！！

そう思つた瞬間、ラキシユは目を閉じることすら忘れて。

だから、見えた。

その刃が自分に届かないことは、目を閉じていたらきつと理解す
るのは遅れた。

ギインッ！！！！

平和な上流階級に育つた彼女には耳慣れない、剣と剣がぶつかる
重い金属音が耳をつんざき、ラキシユの紫色の双眸には、黒髪が揺

れた。

二人の少年 3

「レイ!？」

今度こそ完全に腰が抜ける。ぺたん、という可愛らしいものではなく、どすんと派手に尻餅をつきながら、ラキシユは思わずそんな名前を口走っていた。

その瞳が捉えたのは、自分めがけて振りかざされた剣を跳ね上げている、黒髪の男。

(まさかまさか、ほんとに助けにきてくれた!?)

鼓動が早まり、思考が混乱する。だが展開はラキシユに冷静に考える時間を与えてはくれない。

黒髪の男が作り出した一瞬の虚に、別の動きがラキシユの視界の端に引つ掛かった。そちらに目を向ける頃には、幼女を人質に取るうとしていた男もまた、剣を弾き飛ばされている。こちらはきいんと澄んだ音を立て、綺麗な弧を描いてとんでゆく。

それと同時に、少女の母親は危険も顧みず飛び出すとその小さな手をひいて自分の方へ引き寄せた。泣きじゃくる少女を見て、助かったんだ、とラキシユはとりあえずほっと息をついた。

——だが、安堵するには、まだあまりに早すぎた。

「きゃああああ!？」

またも悲鳴をあげることになる。

そういえば男は三人人いたっけ。そう考え終わる頃には喉元に冷たい感触がして、それどころではなくなった。

叫ぶことすら封じられる。

「全員、動くな!!」

意外と細い声が、頭のすぐ上で聞こえた。だけどいくら細い声でもラクシユにとつては死の宣告にも等しく、恐ろしさがそれで消えることなどありはしない。

視線を下にむければナイフがきらめき、ラクシユは慌てて目を背けた。

誰も動く者はいない。ついでを言うなら、黒髪の男と対峙した男も、少女を人質にしていた男も、既に動けない状態にされているようだったが、だからといって事態が有利になったようには当然ながらラクシユには思えないのである。

だけど、ラクシユはこの瞬間、もっとも場違いなことを考えていた。

(レイじゃない……)

冷静になったわけじゃないのだが、今にも取り乱しそうに、恐怖に胸は潰れそうなのだが、ただ前を向かされて動くことすら封じられたら嫌でもちゃんと目に入る。

黒髪も体型も似ていたが、ただ彼はレイより少し髪が短かったし、顔は似ても似つかない。

瞳は金色で切れ長、レイも恋人の鼻肩目を抜きにしても格好良い部類に入と思うが、彼はまたレイとはタイプが異なる美少年だった。

「貴様ら、^{フライヤー}“飛ぶ者”か……?」

また、頭上で声がする。

問いかけというより呻きに近かったが、どちらにせよ誰も応える

ものはいなかった。そもそもラキシユには、その呻きの意味すら解らない。

理解する前に、再び男は叫ぶ。

「武器を捨てろ！！」

事態はまだ自分に有利だと確信したのか、その声はさっきよりも幾分かしっかりしていた。

ラキシユの目線は専ら、黒髪金目のその少年に釘付けだったのだが、彼の視線が移動したのでつられて彼女もそちらへ視線を走らせる。

そうだ、もう一人いた。

人質を取った男の剣を、誰かが弾き飛ばしたはずだ。ラキシユの視線が、今度はそちらへ移動する。そこにいたのは、小柄な少年だった。

どこの国の人なんだろう、とまたも場違いなことを考える。髪の色は初めて見る銀色、瞳は澄んだ水色で、なんとも涼やかな少年だ。二人から視線を向けられたことに気付いているのかいないのか、だけどそんなことはお構いなしとばかりに迷わず彼は持っていた短剣を、ぽいと床に転がした。くるくると回りながら、小さな剣は男の足元近くまで滑ってゆく。それを見て、黒髪の少年も彼に倣い、抜き身の長剣を収めると、無造作に鞘ごと男の方へ放り投げた。静まり返る、その緊迫した空気の中で、がしんとその音がやたら大きく響き渡ると、にやりと男は笑ったのだろう。ラキシユからは見えないのだが、髪に吐息がかかり、ぞくりと肌があわ立った。いよいよ、絶対絶命。

——なはずの、状況なのに。

ラキシユの視界で、銀髪の少年はニコリと笑う。

（——え？）

その笑顔の意味がわからず頭いっぱい疑問符を浮かべたラキシユを男がぐいと引っ張る。

いや、引っ張ったのではない。ラキシユを抱えたまま、少年達の手放した武器を拾おうとしているのだ。

その瞬間、まったくの突然に、ラキシユはあの涼やかな少年の笑みの意味を理解した。

武器を拾おうと懸命に手を伸ばす——その作業に集中している男の足を、ラキシユはおもいきり踏みつけた。

「——ッ！！？」

ラキシユの体重など知れているが、ヒールを利用して全体重をかければ、かなり痛い筈だ。男の手の力が緩む。もしろんこの好機を逃す筈もない。命がかかっているとすれば、その一瞬に全神経を集中させることなど容易いことで——

刹那、今までの膠着は嘘のように、めまぐるしく場面は動いた。

ラキシユが、男の腕から逃れ、走る。

黒髪の少年が、その手を掴んで引き寄せる。

男が、こめかみに青筋を立てながら、武器を拾って追隨する。

最後に銀髪の少年が、その行く手を阻むように立ちふさがった。だが、丸腰の彼に、男は怯むことなく剣を振りかぶる。

「危ない！！」

振り向いたラキシユの目に飛び込んできたのは、丁度男が少年に

斬りかかるシーンだった。

思わず悲鳴を上げて顔を覆ったラキシユだったが。

「大丈夫」

耳元で声がして、目を開ける。今度は丁度男が宙を舞っているところだった。

ずん、と重い音がして、男の体が床に沈む。

何が起こったのか、ラキシユには——いや、おそらく男にも。解らなかつただろう。

投げた男の腕の関節を極めながら、ふう、と息をつく少年は改めて見ると酷く小柄で、ラキシユは目をぱちくりさせた。

「武器、持ってた方が邪魔だったんだよね」

不敵に呟き、少年は涼やかに笑った。

二人の少年 4

「オレ、体術の方が得意なの」

あっけらかんと言う少年を、ラキシユはぽかんとした表情で見つめた。

だが、すぐにしゃきつと姿勢を正して優雅に頭を下げてみせる。

「助けて頂いて有難う御座いました。私、ラキシユ＝ウィルバードと申します」

顔を上げると、今度は少年の方がぽかんとしていた。

それもまた一瞬で、すぐに彼はくすくすと笑い始めた。

なんで笑うのか、と聞こうとしてやめる。命の恩人に失礼があつてはウィルバード家の名折れだ。穏やかな笑顔を貼り付けたまま黙っている、彼も笑うのをやめた——といつてもくすくす笑いをやめただけで、表情は相変わらずニコニコと笑っていたが。

「ご丁寧にどうもありがとう。オレはセルフート＝セイリス、そつちの黒髪のはユリス＝フレイヴィア。君のお蔭でこちらこそ助かつたよ。ありがとう」

微笑む彼——セルフートに、ラキシユは首をかしげた。

一般客室は、まだ興奮冷めやらない。

歡喜するもの、脱力するもの、安堵に泣きじゃくるものと様々だが、皆一様に勇敢な少年達に礼を言つて頭を下げた。

少女の母親はラキシユにも何度も涙ながらに頭を下げたが、何かできたわけでもない悲鳴をあげていただけのラキシユにしてみれば、私は何もしてないですと気まずく手を振るだけで精一杯だった。

その後黒髪の少年——ユリスが船の警備員を捜して回つたが、警備員の制服が見つかっただけで、賊は最初から警備員に扮してこの船に乗り込んでいたようだ。彼らを縛り上げて嚴重に閉じ込める。

それは、乗り合わせた男性を筆頭に行われた。
つまり、ラキシユは最初から最後までとくに何もできなかったの
である。

それなのに礼を述べられて、ラキシユは戸惑っていた。

「……私、何も……」

怪訝な顔で言うラキシユに、だがセルフフートは首を横に振る。

「いや、君があいつらの気を逸らしてくれたからオレらも動けたんだし。けど、よくオレが言いたいことわかったね、あのとき」

セルフフートが足を踏むジェスチャーをしたので、それが何を指しているかすぐにわかり、ラキシユは「ああ、」と目を見開く。

「だって、あんな状況で、セルフフートさんが笑うから。慌てた顔とか緊迫されて何かさせようとしてたらできなかったかもしれない。私、すぐパニックになっちゃうし」

「あ、ごめん。呼びにくいでしょ。セルフフートって。セイルでいいよ、みんなそう呼ぶし。あと呼び捨てでいいよ。年、そんな違わないでしょ？」

言外に歳を聞かれていることに気付いて、ラキシユが答える。

「十六歳」

「おお、タメだ」

「……タメ？」

ラキシユが聞きなれない言葉を反芻すると、セイルとユリシスは顔を見合わせた。

「……同じ年ってことだよ」

ややあつてセイルが答える。

そうなんだ、と改めてラキシユは二人をしげしげと眺めた——勿論、失礼にならない程度にだったが、それでも目ざとく或る物に気付いて声をあげる。

「セイルって、結婚してるの？」

何気ないラキシユの言葉に、二人はキョトンとした目を彼女に向ける。

だが、すぐにセイルは表情を緩めた。

「ああ……これ？」

左手を上げ、右手で指差す。その薬指には、幅広で装飾のない、シンプルなシルバーのリングが嵌まっている。

「別に結婚はしてないけど。結婚してないのにペアリングするのっておかしい？」

「うっん、おかしくはないけど……左手にしていたから。あ、出身が違うからかしら。私の地元では左手に嵌めてたら結婚指輪だったの」

「や、オレの地元でもそうだけどさ……」

頬を掻きながらセイルが苦笑する。その苦笑の意味をラキシユが尋ねようとすると、それは別の声に阻まれた。

「すみません。あの——」

黙って話を聞いていたユリシスが真つ先に顔をあげ、次いでラキシユとセイルもそちらを見やる。他の乗組員とは違う制服は普通のものより装飾が派手で、船長ではないかと想像がついた。

「あなたたちは、“飛ぶ者”^{フライヤ}なのですか？」

彼の視線の先に、自分も含まれていることに気付いて焦るラキシユを尻目に、セイルとユリシスは再び顔を見合わせた。

「彼女は違いますよ。ボクらは一応そうですけど」

セイルがそう答えると、船長は表情を引き締めた。

「では、いかほどの報酬を……」

「あ、それは別にいいんです。一応ライセンスは持ってますが、プ

口じゃないですから」

目を丸くする船長に、セイルは少し困ったような顔で微笑みかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7012u/>

FLYING

2011年10月31日14時19分発行